

デート DV における暴力の頻度と精神的ダメージ： ジェンダーと暴力の双方向性への着目

赤澤淳子¹ 井ノ崎敦子² 上野淳子³ 松並知子⁴ 青野篤子¹
(心理学科¹) (徳島大学²) (四天王寺大学³) (武庫川女子大学⁴)

デート DV の方向性と被害経験、精神的ダメージ、加害経験、および二者の関係性との関連について、男 66 名、女 267 名の大学生を対象に調べた。その結果、経験頻度と精神的ダメージの関係は性別および暴力が双方向か一方か逆になり、暴力を頻度だけでなくダメージから見る重要性が示された。双方向暴力の経験者は一方暴力の経験者より暴力の頻度が高く、一方の暴力が他方の暴力を誘発することが示唆された。

【キーワード デート DV 双方向性 精神的ダメージ ジェンダー】

親密な二者関係の暴力は 1970 年代後半に Waker (1979) によって明らかにされ、夫が加害者で妻が被害者という構造が定着した。しかし、その後 1980 年代以降欧米において盛んに行われるようになったデート DV の調査研究では、被害者であるとされた女性の方が男性より、わずかにではあるが頻繁に身体的暴力を行使していること(e.g., Archer, 2000; Magdol, Moffitt, Caspi, Newman, Fagan, & Silva, 1997)、青年期の男性におけるデート DV 被害も深刻であることが明らかになっている(e.g., Bookwala, Frieze, Smith, & Ryan, 1992; Howard & Wang, 2003;)。大学生を対象としたデート DV 研究では、対象者の半数以上が暴力被害と加害の両方を経験していると報告されている(e.g., Billingham, 1987)。

Johnson & Ferraro (2000) は、夫婦間の暴力を 4 つのパターンに分類している。一つ目は、“common couple violence” であり、深刻な暴力を含まず、暴力がエスカレートすることもない。二つ目は“intimate terrorism” であり、相手を支配することを目的とした一方的な暴力で、深刻な怪我をもたらすことがある。三つ目は“violent resistance” で自己防衛のための暴力であるが、時に配偶者を死に至らしめることもある。四つ目は“mutual violent control” であり、双方が相手を支配しようとして暴力をふるう。彼らの研究は、互いに相手を支配するための暴力や自己防衛のための暴力など、暴力を行使する理由や目的に違いがあることを明らかにしている。Whitaker, Haileyesus, Swahn, & Saltzman (2007) によれば、親密な二者間の暴力の 50% は相互的であり、女性が傷害を被りやすいのは相互的な場合であるとも報告されている。

国内においては欧米に 20 年遅れて 2000 年頃から、DV やデート DV の調査研究が行われるようになったばかりである。欧米の先行研究は、暴力が一方か双方向かという暴力の方向性や、自己防衛のための暴力か否かという暴力の行使理由によって、暴力の在り様や二者

間の関係性評価が異なることを示唆している。しかし、国内のほとんどの研究において、被害経験と加害経験は別々に検討されており、暴力の方向性については検討されていない(赤澤, 2015)。そこで、本研究では、暴力の方向性から、デート DV の被害・加害経験および被害の結果として引き起こされる精神的ダメージの差異について検討する。

本研究で取り上げる精神的ダメージとは、暴力を受けた後に感じる悲しみ、恐れ、怒りなどの感情である。これまでのデート DV に関する研究では、暴力の実態を測定する尺度として、経験した暴力の頻度が用いられてきた。しかし、暴力の種類によっては、1回であったとしても被害者に大きな恐怖や苦しみを与えるものもあるだろうし、何度も繰り返し受けることによって苦痛を感じることもあるだろう。また、同じ暴力の頻度であっても受けるダメージには性差があることが示唆されている(赤澤・竹内, 2015; Frieze & Davis, 2000; 李・塚本, 2005)。

暴力の被害を受けた後に、深刻な精神的ダメージである PTSD(心的外傷後ストレス障害)が生じることは広く知られているが(小西, 2004), PTSD 構造化面接で使用される臨床診断面接尺度においても、出来事の頻度とともに強度が問われている(飛鳥井・廣幡・加藤・小西, 2003)。飛鳥井他(2003)では、PTSD の中核症状に関する強度について、どの程度の強さで気持ちの負担や不快を感じたかについて尋ねた項目もある。これは、暴力について検討する際には、暴力の頻度と暴力被害により惹起されたダメージとの両側面をみていくことの重要性を意識したものである。精神的ダメージを加えることにより、頻度だけではみえない暴力の影響を可視化できる可能性がある。

本研究では、一方向か双方向かという暴力の方向性と二者間の関係性とは密接な関係があると考えられるため、二者間の関係性評価についても検討する。関係性評価の指標として、デート DV の規定要因とされるパートナーとの共依存的な関係性を肯定する依存的恋愛観と、パートナーから支配されているという感覚として被支配感を用いる。

本研究の目的は、暴力の方向性と性別による被害経験、精神的ダメージ、加害経験、および関係性評価との関係を検討することである。暴力の方向性による暴力経験や関係性の特徴を捉えることは、若者を対象とした予防・防止プログラムを作成する時にも参考になるものと考えられる。

方 法

調査参加者 中国、近畿、北陸地方の 4 年制大学、短期大学の学生に質問紙調査を行い、616 名の回答を得た(男性 141 名、女性 461 名、その他 1 名、不明 13 名、平均年齢 19.97 歳、 $SD=1.01$ 歳)。依存的恋愛感項目の因子分析については 616 名のデータを用いた。その他の分析については、これまでに交際経験があると回答し、欠損値がない男性 66 名、女性 267

名の計 333 名(平均年齢 20.02 歳, $SD=$.99 歳)を対象とした。

質問項目 (a)デート DV 被害経験・加害経験・精神的ダメージ: デート DV で行使される暴力について, Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman (1996)による CTS2 (The Conflict Tactics Scales 2)や赤澤・竹内(2015)を参考に, 種類や程度を勘案し身体的暴力 3 項目, 性的暴力 3 項目, 相手を服従させるような精神的暴力 3 項目, 相手を孤立させるような精神的暴力 3 項目, 相手の自尊心を低下させるような精神的暴力項目の計 18 項目を作成した。被害・加害経験については「これまでに一度もない(1 点)」から「20 回以上(7 点)」の 7 件法を用いた。精神的ダメージについては, 恋人から該当する行為を受けた場合, 「悲しみ, 恐れ, 怒り, 苦しみ, 嫌悪, 憎しみ, 自己嫌悪等」のような感情をどの程度抱くかについて 5 件法で尋ねた。

(b)依存的恋愛観: 松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野(2015)による依存的恋愛観尺度 10 項目を用い, 5 件法で回答を求めた。「恋人の間では, 干渉は愛の表れだから正当化される」など交際相手への依存に関する 7 項目と「恋愛すれば, 女性は料理したり, 男性の世話をしなければならぬ」など性別役割に関する 3 項目から構成されている。

(c)被支配感: 上野・松並・青野・赤澤・井ノ崎(2015)の恋人による被支配感尺度 10 項目を用い, 5 件法で回答を求めた。「いつも恋人の顔色をうかがい, びくびくしてしまう」や「恋人が機嫌を損ねないように, いろいろなことを我慢している」などの項目から構成されている。

倫理的配慮 対象者に調査の目的を口頭ならびに紙面で説明し, 調査への参加は自由意志で行い, 回答を辞退してもそれによって何の不利益も被らないことを伝えた。また, 調査は無記名であり, 統計的に処理するため個人が特定されることはないことも伝えた。さらに, 本研究の調査内容により途中で気分が悪くなったら回答を辞めても良いことを調査前に伝えた。対象者の中にデート DV の被害者も含まれている可能性があるため, DV 相談機関の紹介を末尾に掲載した。なお, 本研究は「福山大学学術研究倫理審査委員会」に倫理審査書類を提出し, 承認を得ている (通知番号 H28-ヒト-2 号)。

結 果

1. 尺度の構造

デート DV 被害経験項目について因子分析(主因子法 *promax* 回転)した結果, 4 因子-「精神的暴力: 自尊心低下(以下, 自尊心低下) ($\alpha=.870$), 「精神的暴力: 孤立(以下, 孤立) ($\alpha=.715$), 「身体的暴力, 脅迫(以下, 身体・脅迫) ($\alpha=.806$) 「性的暴力」 ($\alpha=.886$)-が抽出された(Table 1)。加害経験および精神的ダメージ項目についても, 被害経験の因子分析結果に基づき分類した。

依存的恋愛観の項目について因子分析(主因子法 *varimax* 回転)し, 共通性の低い 3 項目を

削除した後に再分析した。その結果、松並他(2015)と同様に1因子が抽出され、「依存的恋愛観」($\alpha=.727$)とした。被支配感の項目について因子分析(主因子法 *varimax* 回転)し、共通性の低い2項目を削除した後に再分析した。その結果、上野他(2015)と同様に1因子が抽出され、「被支配感」($\alpha=.789$)とした。

Table 1 デートDVの被害経験尺度の因子分析結果

	1	2	3	4
<自尊心低下> $\alpha=.870$				
あなたを否定したり、意見を認めなかったりする	0.887	-0.043	-0.018	-0.044
自分が怒る原因はあなたにあると、相手から責められる	0.840	-0.176	0.051	0.075
相手の意に沿わないと無視される	0.698	0.046	0.005	-0.044
大声で怒鳴られる	0.568	0.205	0.026	0.022
あなたの身体的な特徴について悪口を言ったり、見下した言い方をしたりする	0.437	0.261	0.118	-0.097
あなたを人前で侮辱したり、ののしたりする	0.437	0.259	0.061	0.042
あなたに無断で携帯メールや着信履歴を見られたり、消されたりする	0.381	-0.010	0.030	0.361
<身体・脅迫> $\alpha=.806$				
物をあなたに向かって投げられる	-0.060	0.955	-0.024	-0.101
げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる	-0.061	0.880	0.087	-0.110
顔や身体を平手で殴られる	0.212	0.610	-0.126	0.049
殴るふりや、物を投げるふりをしてあなたを脅す	0.179	0.522	-0.115	0.168
別れるなら死んでやると言われる	-0.155	0.518	0.108	0.298
<性的暴力> $\alpha=.886$				
性交を強要される	-0.025	-0.015	0.944	-0.015
あなたが性交渉に応じないと不機嫌になる	0.133	-0.025	0.799	-0.043
無理矢理キスされたり、身体に触れられたりする	-0.003	0.015	0.760	0.086
<孤立> $\alpha=.715$				
いつも一緒にいることを要求される	-0.058	-0.004	0.095	0.759
友人との付き合いを制限される	-0.082	0.047	0.039	0.721
いつも行き先を告げさせられたり、報告させられたりする	0.249	-0.103	-0.137	0.578
回転後の負荷量平方和	5.777	5.192	4.642	4.611
分散の%	39.982	7.418	6.459	3.872

2. 暴力の方向性別に検討した被害経験, 精神的ダメージおよび加害経験

被害・加害経験項目の評定値から、暴力の種類ごとに、経験が全くない者を暴力無群、被害経験のみある者を被害者群、被害経験と加害経験の両方がある者を双方向群、加害経験のみがある者を加害者群に分類した(Table 2)。

暴力の種類ごとに被害経験および精神的ダメージについて、性別(男性・女性)と暴力の方向性(一方向・双方向)による差異を検討するために、2要因の分散分析を行った(Table 3)。その結果、被害経験については、「自尊心低下」と「性的暴力」において性別の主効果が有意であり、男性は女性より高かった。また、「自尊心低下」「身体・脅迫」「孤立」において方向性の主効果が有意であり、双方向群は被害者群より高かった。「性的暴力」では交互作用が有意で、双方向群において男性は女性より、男性において双方向群は被害者群より被害経験が高かった。精神的ダメージについては、全ての暴力において性別の主効果が有意で、女性は男性より高かった。また、「孤立」において方向性の主効果が有意で、被害者群は双方向群より精神的ダメージが高かった。

Table 2 暴力の方向性による分類

		暴力の方向性			
		暴力無群	被害者群	双方向群	加害者群
自尊心低下	男性 (人)	16	15	32	3
	女性 (人)	106	48	91	22
身体・脅迫	男性 (人)	40	15	8	3
	女性 (人)	218	23	17	9
性的暴力	男性 (人)	45	9	10	2
	女性 (人)	175	81	10	1
孤立	男性 (人)	16	27	19	4
	女性 (人)	123	66	63	15

Table 3 性別と暴力の方向性別に検討した被害経験と精神的ダメージ

	男性		女性		F値		
	被害者群	双方向群	被害者群	双方向群	性別	方向性	交互作用
自尊心低下							
被害経験	14.80 (8.62)	17.94 (8.39)	11.23 (5.88)	15.98 (8.05)	4.02 *	8.17 **	0.34
精神的ダメージ	19.87 (4.58)	20.34 (4.64)	24.06 (5.51)	23.68 (4.36)	19.40 ***	0.01	0.25
身体・脅迫							
被害経験	8.93 (3.57)	14.25 (6.18)	10.00 (5.77)	10.18 (4.30)	1.23	4.11 *	3.60 †
精神的ダメージ	16.20 (3.34)	11.88 (4.70)	16.26 (5.10)	17.00 (4.02)	4.73 *	2.26	4.51 *
性的暴力							
被害経験	7.67 (5.52)	12.50 (5.50)	7.59 (3.86)	6.60 (3.10)	6.51 *	2.69	6.19 *
精神的ダメージ	7.00(1.41)	6.70 (2.67)	10.47 (2.14)	8.90 (2.81)	20.37***	2.21	1.02
孤立							
被害経験	8.85 (4.55)	10.05 (3.60)	7.05 (3.61)	9.29 (4.46)	3.29 †	5.89 *	0.54
精神的ダメージ	8.19 (2.18)	7.79 (2.92)	10.00 (1.84)	8.24 (2.08)	9.44 **	8.58 **	3.44 †

()内は標準偏差

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

次に、暴力の種類ごとに加害経験について、性別(男性・女性)と暴力の方向性(一方向・双方向)による差異を検討するために、2 要因の分散分析を行った(Table 4)。その際、「性的暴力」については、男女ともに加害者群が 1~2 名であったため、双方向群のみの比較とした。分析の結果、全ての暴力において有意な差は示されなかった。「性的暴力」において性別の主効果に有意傾向が示され、男性は女性より加害経験が高い傾向であった。また、「孤立」において交互作用が有意傾向で、男性の双方向群は加害者群より加害経験が高い傾向であった。

Table 4 性別と暴力の方向性別に検討した加害経験

	男性		女性		F値		
	双方向群	加害者群	双方向群	加害者群	性別	方向性	交互作用
自尊心低下							
加害経験	14.47 (7.11)	13.33 (7.57)	13.29 (5.51)	9.54 (1.99)	1.87	1.82	0.52
身体・脅迫							
加害経験	10.00 (4.54)	11.67 (9.81)	9.41 (3.10)	8.11 (2.37)	1.68	0.01	0.86
性的暴力							
加害経験	8.30 (3.30)	—	5.90 (2.51)	—	1.83 †	—	—
孤立							
加害経験	10.05 (4.81)	5.75 (1.71)	7.94 (3.66)	7.94 (4.18)	0.001	3.11 †	3.10 †

()内は標準偏差

† $p < .10$

3. 暴力の方向性別に検討した依存的恋愛観と恋人による被支配感

暴力の種類ごとに依存的恋愛観と恋人による被支配感について、性別(男性・女性)と暴力の方向性(一方向・双方向)による差異を検討するために、2 要因の分散分析を行った(Table 5)。その際、「性的暴力」については、男女ともに加害者群が 1~2 名であったため、3 群の比較とした。分析の結果、依存的恋愛観については、「孤立」において方向性の主効果が有意で、下位検定(Tukey法)の結果、双方向群は暴力無群や被害者群より高かった($p < .05$)。また、「性的暴力」において方向性の主効果が有意傾向で、双方向群は被害者群より依存的恋愛観が高い傾向であった。恋人による被支配感については、「自尊心低下」と「性的暴力」において方向性の主効果が有意だった。下位検定(Tukey法)の結果、「自尊心低下」では被害者群と双方向群が暴力無群より、被害者群が加害者群より被支配感が高かった($p < .05$)。「性的暴力」においても、被害者群と双方向群が暴力無群より被支配感が高かった($p < .05$)。「身体・脅迫」と「孤立」では、交互作用が有意であった。下位検定(Bonferroni)の結果、「身体・脅迫」では、被害者群の女性は男性より、また、女性の被害者群は暴力無群と加害者群より被支配感が高かった($p < .05$)。「孤立」では、被害者群の女性は男性より、加害者群の男性は女性より、女性の被害者群は暴力無群より、被支配感が高かった($p < .05$)。

Table 5 暴力の方向性別に検討した依存的恋愛観と被支配感

	男 性				女 性				F 値		
	暴力無群	被害者群	双方向群	加害者群	暴力無群	被害者群	双方向群	加害者群	性別	方向性	交互作用
自尊心低下											
依存的恋愛観	18.88 (3.32)	18.20 (4.81)	18.09 (4.77)	21.33 (7.51)	18.07 (4.56)	17.13(4.48)	19.33 (4.74)	18.68 (4.90)	0.88	0.94	1.20
被支配感	16.81 (5.58)	19.33 (7.15)	19.97 (5.44)	12.00 (2.00)	16.00 (5.28)	21.19 (7.10)	19.16 (6.78)	16.64 (6.16)	1.08	5.93**	1.06
身体・脅迫											
依存的恋愛観	18.80 (4.74)	17.73 (4.30)	18.75 (3.11)	16.67 (7.57)	18.13 (4.48)	18.09 (5.67)	20.29 (4.57)	21.44 (5.90)	2.19	0.59	1.25
被支配感	18.42(6.10)	17.20 (5.80)	22.13 (5.17)	20.67 (7.23)	17.67 (6.18)	22.17 (8.42)	20.12 (5.77)	13.33 (5.39)	0.87	2.08	3.26*
性的暴力											
依存的恋愛観	18.20 (4.36)	16.67 (4.24)	21.40 (5.02)	—	18.39 (4.31)	18.17 (5.30)	19.50 (6.02)	—	0.006	2.70 †	0.83
被支配感	17.53 (5.19)	20.44 (7.35)	22.20 (7.48)	—	16.78 (5.70)	20.23 (7.60)	22.90 (3.66)	—	0.005	8.82***	0.13
孤立											
依存的恋愛観	18.75 (2.59)	16.89 (4.00)	19.74 (6.03)	21.75 (2.87)	17.87 (4.53)	16.86 (4.53)	21.00 (4.19)	18.20 (4.49)	1.02	7.35***	1.24
被支配感	17.38 (4.87)	17.04 (5.10)	20.89 (7.23)	24.75 (3.86)	17.14 (5.95)	20.21 (7.49)	17.98 (6.42)	16.53 (4.98)	3.33 †	1.65	4.45**

()内は標準偏差

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考 察

1. 尺度の構造

デート DV 被害経験項目について因子分析した結果、4 因子—「自尊心低下」、 「孤立」、 「身体・脅迫」「性的暴力」—が抽出された。精神的暴力については想定したように 3 側面が抽出され、信頼性も高かった。デート DV や DV の暴力の種類については、精神的暴力は一括りにされることが多い。しかし、精神的暴力は多様な内容を含み、かつ、暴力とみなされにくいいためその内容と影響力に配慮し検討する必要性がある(上野, 2014)。本研究では、精神的暴力は 3 側面に分類されたことから、精神的暴力の内容や影響について詳細に検討しうる尺度が構成されたと考えられる。また、精神的暴力の中でも脅迫のように相手を服従させる暴力が、身体的暴力項目とともに 1 因子として抽出されたことから、脅迫行為を身体的暴力に匹敵するものとして捉えられることが赤澤・竹内(2015)と同様に本研究においても確認された。

2. 性別と暴力の方向性別に検討した被害経験, 精神的ダメージおよび加害経験

性別と被害経験との関連をみると、自尊心を低下させる暴力においては、男性の被害経験が女性より多かった。また、性的暴力においては、双方向群で性差が示され、男性の被害が女性より多かった。身体的暴力や相手を孤立させるような暴力においては性差は示されなかった。Archer (2000)は、親密な二者関係における身体的暴力に関する研究論文のメタアナリシスを行い、女性が男性より暴力を行使することを報告している。本研究で性差が示されたのは自尊心を低下させるという精神的暴力であったが、女性より男性の被害経験が多いという点については一致しており、男性は女性と同じ程度、あるいはそれ以上に被害を受けていることが本研究においても明らかとなった。

暴力の方向性については、本研究の調査対象者のうち暴力経験がある者の約半数が双方向性の暴力を経験していることが明らかとなった。また、双方向群は被害者群より、身体的暴力や精神的暴力の被害経験が高いという結果が示された。また、性的暴力においては、男性の双方向群は被害者群より被害経験が多いという結果であった。本研究の対象者の被害経験や加害経験の平均値は全体的に低く、Johnson & Ferraro (2000)の分類に従えば、“common couple violence”であり、深刻な暴力を含まない者がほとんどであると考えられる。よって、被害のみを受けている者においても、“intimate terrorism”を受けている可能性は低いと考えられる。そのため、双方向の暴力を経験する者の方が、暴力への応酬として抵抗型暴力を用いることにより、暴力の連鎖が生じ、被害者群より被害経験が高くなったのだと推測される。

自尊心を低下させるという暴力の被害経験は男性の方が多かったが、精神的ダメージにおいては女性の方が男性より高いという結果が示され、被害経験と精神的ダメージとの齟齬が明らかになった。これは同程度の暴力を受けた場合には、暴力の結果として被るダメージは女性の方が高いことを示唆するものである。Frieze (2005)は、女性は男性よりパートナーに対する身体的攻撃にかかわることが高いが、女性は男性より高頻度で傷つけられると指摘している。本研究より、身体的な傷つきだけでなく、また、精神的暴力であっても女性の方が男性より暴力による精神的ダメージが大きく、暴力の与える影響の大きさが示唆された。

同様に、相手を孤立させるという暴力においては、双方向群が被害者群より被害経験は高かったが、精神的ダメージは被害者群の方が高いという結果が示され、ここでも被害経験と精神的ダメージとの齟齬が示された。双方向群では、被害者と加害者は常に入れ替わるため、怒りや悲しみという精神的ダメージは感じるものの、そのダメージを暴力の応酬としてある程度発散させられるのではないだろうか。一方、被害者群では暴力の応酬はなく、一方的に暴力を受けていることから精神的ダメージが蓄積するため、ダメージの影響が大きいのだと考えられる。

加害経験については、男性は女性より性的暴力の加害経験が高い傾向が示された。日本のデートDVの調査研究論文を概観した赤澤(2016)によれば、身体的暴力と精神的暴力の加害経験率における性差は一貫していなかったが、性的暴力加害では性差が顕著で、男性の加害率が有意に高いことが明らかになっている。性的暴力は、ジェンダーの非対称性が強く反映された暴力だといえる。また、性交渉については、男子がイニシアチブを取るという規範があり、実際、恋愛関係にあるカップルにおいては交際が告白からキス、セックスに進むにつれてイニシアチブを発揮する女子は減少し、男子が増加するという男女間の違いが生じているという(永田, 2013)。性交渉における、このような暗黙の規範が、性的加害経験における性差に影響を与えている可能性がある。

相手を孤立させるという暴力において、男性の双方向群は加害者群より加害経験が高い傾

向が示された。双方向群においては、双方に相手を他の人間関係から孤立させ、二人だけの濃密な二者関係に巻き込まれており、より相手への依存が高まることにより、加害経験が高くなる可能性がある。

以上のように、本研究では、被害経験と精神的ダメージを性別および暴力の方向性から検討した結果、頻度の高さが必ずしも精神的ダメージの高さと一致しないことが明らかとなり、暴力を頻度と精神的ダメージとの両側面から見ていくことの重要性が示唆されたといえる。また、双方向の暴力を経験している者は、一方向の暴力を経験している者より被害経験が多く、二者間の相互作用が攻撃を誘発し、一方の行動は交際相手からの同様の行動を引き出す(Capaldi & Kim, 2007)可能性が示された。

3. 暴力の方向性別に検討した依存的恋愛観と恋人による被支配感

依存的恋愛観については、相手を孤立させるような暴力において、双方向群は暴力無群や被害者群より高かった。また、性的暴力では、双方向群は被害者群より依存的恋愛観が高い傾向が示された。伊田(2010)は、カップルが二人を一体とみなし、相手が自分の思いとおりになって当然という自分と相手の区分消失のような発想を「カップル単位の恋愛観」と呼んでいる。本研究における依存的恋愛観はまさにこの「カップル単位の恋愛観」である。先述したように、孤立させるという暴力を双方向で行う者は、自他ともに相手を他の人間関係から遠ざけ、二人だけの濃密な二者関係に巻き込むことにより、自他の区分が消失しやすくなると推測できる。また、性的な行為は他者との一体感を高めやすいことから、性的暴力を双方向で行う者においても自他の領域が曖昧となりやすいのではないかと考えられる。

恋人による被支配感については、自尊心を低下させるような暴力において、被害者群と双方向群が暴力無群より、被害者群が加害者群より高かった。性的暴力においても、被害者群と双方向群が暴力無群より被支配感が高かった。身体的暴力、脅迫、相手を孤立させる暴力では、女性の被害者群は暴力無群より、被支配感が高かった。伊田(2010)は、デートDVを引き起こす要因のひとつとして、加害者が「力による支配」を肯定しているという点を挙げている。双方向群も被害者群もともに加害者からの被害経験を受けているという共通点があり、加害者である恋人からの支配を強く感じていることが明らかとなった。

また、身体的暴力、脅迫、相手を孤立させる暴力では、被害者群の女性は男性より被支配感が高く、被害者群の中でも性差が示された。被害経験による精神的ダメージにも性差が示されていたが、暴力により支配される程度においても男女で異なる可能性が示唆された。さらに、相手を孤立させる暴力においてのみ、加害者群の男性は女性より被支配感が高いという結果も示された。井ノ崎・上野・松並・青野・赤澤(2012)によれば、見捨てられ不安が高いとらわれ型の愛着スタイルである者は、デートDV加害のリスクが高いことが指摘されている。つまり、加害男性は対人関係の不安定さを抱えており、被害者が自分から離れていか

ないようにするための暴力をふるう一方で、被害者が自分から離れていってしまうのではないかという気持ちに支配されているのではないだろうか。

本研究の限界と課題

本研究では、性別と暴力の方向性に焦点を当てて暴力経験、精神的ダメージ、および関係性評価について検討したが、加害のみ行使する群の人数は他の群に比べて非常に少なかった。また、一般的に深刻とされている身体的暴力や性的暴力の加害頻度は精神的暴力よりも低かった。つまり、暴力の加害評価においては、社会的望ましさが影響して過小評価されている可能性がある。Follingstad & Edmundson (2010)によれば、調査参加者は交際相手より自身の暴力の頻度や交際相手へのネガティブな影響を過小評価していることを明らかにしている。よって、今後は調査票に社会的望ましさ尺度を加えたり、ペアデータを収集したりするなどして、暴力経験についてより正確なデータが得られるようにする必要がある。

また、本研究では、国内におけるデートDV研究では、ほとんど着目されてこなかった暴力の方向性という視点を導入して分析を試みた。しかし、二者間の暴力にはいくつかのパターンがあるため、今後は、双方向性の暴力を暴力行使の目的等により分析し更なる検証を進めたい。

引用文献

- 赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV 発達心理学研究, *26*, 288-299.
- 赤澤 淳子 (2016). 国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題 福山大学人間文化学部紀要, *16*, 128-146.
- 赤澤 淳子・竹内 友里 (2015). デートDVにおける暴力の構造について：頻度とダメージとの観点から 福山大学人間文化学部紀要, *15*, 51-72.
- Archer, J. (2000). Sex differences in aggression between heterosexual partners: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, *126*, 651-680.
- 飛鳥井 望・廣幡 小百合・加藤 寛・小西 聖子 (2003). CAPS(PTSD)臨床診断面接尺度) 日本語版の尺度特性 ト라우マティック・ストレス, *1*, 47-52.
- Billingham, R.E. (1987). Courtship violence: The patterns of conflict resolution strategies across seven levels of emotional commitment. *Family Relations*, *36*, 283-289.
- Bookwala, J., Frieze, I.H., Smith, C., & Ryan, K. (1992). Predictors of dating violence: A multivariate analysis. *Violence and Victims*, *7*, 297-311.

- Capaldi, D.M., & Kim, H.K. (2007). Typological approaches to violence in couples: A Critique and alternative conceptual approach. *Clinical Psychological Review, 27*, 253-265.
- Follingstad, D.R., & Edmundson, M. (2010). Is psychological abuse reciprocal in intimate relationships? : Data from a national sample of American adults, *Journal of Family Violence, 25*, 495-508.
- Frieze, I.H. (2005). *Hurting the one you love: Violence in relationships*. Pacific Grove, CA: Thompson/Wadsworth.
- Frieze, I. H., & Davis, K. (2000). Introduction to stalking and obsessive behaviors in everyday life: Assessments of victims and perpetrators. *Violence and Victims, 15*, 3-4.
- Howard, D.E., & Wang, M.Q. (2003). Psychosocial factors associated with adolescent boy's reports of dating violence. *Adolescence, 38*, 519-523.
- 伊田 広行 (2010). デートDVと恋愛 大月書店
- 井ノ崎 敦子・上野 淳子・松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子 (2012). 大学生におけるデートDV加害および被害経験と愛着との関連 学校危機とメンタルケア, 4, 49-64
- Johnson, M.P., Ferraro, K.J. (2000). Research on domestic violence in the 1990s: Making distinctions. *Journal of Marriage and the Family, 62*, 948-963.
- 小西 聖子 (2004). ドメスティック・バイオレンス 白水社
- 李 璟媛・塚本 宜子 (2005). デイティングDVに関する研究. 宮崎大学教育文化学部教育実践研究紀要, 13, 1-18.
- Magdol, L., Moffitt, T.E., Caspi, A., Newman, D.L., Fagan, J., & Silva, P.A. (1997). Gender differences in partner violence in a birth cohort of 21-year-olds: bridging the gap between clinical and epidemiological approaches. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 65*(1), 68-78.
- 松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子・井ノ崎 敦子・上野淳子 (2015). デートDVの被害・加害・ダメージ(2): 依存的恋愛観との関連 日本心理学会第79回大会発表論文集, 1272.
- 永田 夏未 (2013). 青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識 財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 「若者の性」白書—第7回 青少年の性行動全国調査報告— 小学館 pp.101-120.
- Straus, J.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The revised Conflict Tactics Scales (CTS2): Development and preliminary psychometric data. *Journal of Family Issues, 17*, 283-316.
- 上野 淳子 (2014). デートDV研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195-205.
- 上野 淳子・松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子・井ノ崎敦子 (2015). デートDVの被害・加

害・ダメージ(3) : 恋人による被支配感の影響 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 1273.

Waker,L.E.(1979). *The battered woman*. New York:Harper & Row. (Waker, L.E. (1997). バタード・ウーマン(斉藤学, 監訳). 金剛出版).

Whitaker, D.J., Haileyesus, T., Swahn, M., & Saltzman, L. (2007). Differences in frequency of violence and reported injury between relationships with reciprocal and non-reciprocal intimate partner violence. *American Journal of Public Health, 97*, 941-947.

注 : 本研究は JSPS 科研費 JP16K01805 の研究成果の一部である。

Frequencies and psychological damage of dating violence: focusing on gender and reciprocity of violence

Junko AKAZAWA¹, Atsuko INOSAKI², Junko UENO³, Tomoko MATSUNAMI⁴, Atsuko AONO¹

¹ Fukuyama University, ² Tokushima University, ³ Shitennoji University, ⁴ Mukogawa Women's University,

Experiences, psychological damages and directions of dating violence were investigated on questionnaires with 66 male and 267 female college students. The relations between the frequency of violence and the damage were reverse between genders and between reciprocal and non-reciprocal violence, indicating the importance of damage in evaluating dating violence. Reciprocal violence occurred more frequently than non-reciprocal violence, suggesting that violence by one side induces violence by the other side.

【key word : dating violence, reciprocal violence, psychological damage, gender】